問題が生じた場合、できるだけ早く対応することが本人のために良いです。

しかし現在、そうした対応ができるところは少ないです。精神に障がいを持った子どもたちに、より良い療養環境を提供できるよう、今取り組んでいます。それには、ご家庭の支えも大事なものとなりますね。

Q 生活の中で男女の差を意識されたことはありましたか。

男女の差といっても、男性・女性として自ずと異なる部分があるというだけで、仕事上の役割としては、はっきり差があるという風に感じたことはありません。大学で専門を選ぶときに外科は男性が多いような気がしましたが、それは個人の適性だと考えるべきでしょう。私自身は医学部生の時に結婚し子育てもしていましたから、その時には役回りが大変だと感じていました。

私が大学の医学部に入った時には女性は30％程度だったと思います。今では50％を超えているのではないでしょうか。学問的な部分では女性の進出が大きいと思いますが、男女というよりその人個人の目標や価値観が多様化して、それが実現できるような時代になってきているのではないかと思います。

Q 病院の中で、女性だからこそできたということがありますか。

夫はこの医療施設の院長をしています。私は副院長として、施設の運営を支える役目もあります。医療施設は全体でみると就業者の女性が占める割合が、高い業種と思います。当施設でもほとんどが女性です。

そのとりまとめの仕事は、やはり女性の方がやりやすいのではないでしょうか。女性だから話せることもあると思います。彼らがより働きやすいように、職場環境を整えていくことは女性である私の仕事です。

Q これからの女性にエールをお願いします。

あまり大げさな話ではないのですが、私は病院で働く女性たちはもちろん、他の皆さんにも、個人として職業人としても、人とのつながりを大切にしてほしいと思っています。人のつながりの一番の基本は親と子でしょう。この親子関係が難しい状態になると、様々な問題が起きてきます。

夫婦、親子という家庭の中でのコミュニケーションのトレーニングが地域や学校などでの、仲間づくりには欠かせません。いつの時代も、家庭が基本だと思っています。しっかりと勉強し、働くことができるのも、温かい家庭があるからではないでしょうか。自分自身の身の回り、一番身近なところから大切にしていくこと、それが第一歩だと思っています。

（取材：有田、藤本）

翔る「山口ふるさと大使」

杉山敏美（すぎやま さとみ）さん（東京都）

ふるさと山口法人ネットワーク会長・山口ふるさと大使

Q 現在、どのような活動に力を入れて取り組んでおられますか。

今、私は本業のウェブコンサルティング＆プロデュース会社経営の傍ら、有志の皆さんと一緒に、ふるさと山口県の活性化支援に取り組んでいます。山口の食材を使った料理を楽しむグルメ会や、首都圏在住の人をふるさと山口に案内するツアーも実施しています。